

江戸時代の学びと教え

沖田行司
Okita Yukuji

学びとは、得た知識や情報により豊かな人間形成がされ、社会をかたちづくるためのものである。
同時代の世界で類を見ないほど識字率が高かったといわれる江戸時代には、武士を育てた藩校や庶民の子どもに読み書きを学ばせた寺子屋、身分を超えた学び舎であった私塾など、様々な学びの場があった。場と密接に結びついた江戸時代における学びの実際を通して、今求められる学びの場のあり方を探る。

おきた・ゆくじ
1948年京都府生まれ。教育史学者。同志社大学社会学部教授。専門は日本教育史、日本教育思想史。著書に『日本近代教育の思想史研究―国際化の思想系譜』『藩校・私塾の思想と教育』『日本国民をつくった教育』、共編著に『教育社会史』など。

はじめに

江戸時代の藩校や私塾、庶民の学びの場であった寺子屋（手習所）における教育は、一見して現代の体系化された学校組織や豊かな教育カリキュラム、多様な教育方法など、現代教育とは比較にならないように思える。しかし、教育の理想や目的、さらにいえば教育の大前提である教える者と学ぶ者の関係性においては、江戸時代の教育は、決して現代の教育に劣らない。江戸時代の藩校で学ぶ武士の子ども達は生まれながらに指導者としての誇りと使命感を養われて成長する。身分を超えて学んだ私塾では、学ぶ意義と誇りを自覚する教育が行われた。生活と繋がった内容を学ぶ寺子屋の子ども達は、読み・書き・算盤の熟達を通して、人生を豊かにする生活空間を広げていった。これら江戸の学びは、単なる知識や情報の獲得に目的が置かれていたのではなく、人間的な成熟と深く繋がっていたところにその特質が見られる。

封建的身分社会の中であって、農・工・商三民を統治する武士階層に求められた資質をそのまま近代のリーダーの養成に置き換えることができないのは言うまでもない。しかし、卑怯を卑しむ心や、潔く生きること、自己犠牲の精神などは武士に限らず、当時の庶民の価値観にも通底していて、時代を超えて現代にも新鮮な意味を持っている。また、幕末から明治維新にかけて多くの下級武士が見せた、時代を読み取る先見性や、指導力などに、今日の日本人が及ばない「人間力」を発見することもできる。江戸時代の学びの実際に触れて考えてみたい。

I 武士の学びと教育

江戸時代において、武士の教育には四書（論語・孟子・中庸・大学）・五経（易経・書経・詩経・礼記・春秋）などの中国の古典が基本的なテキストとして用いられた。儒学の特質は、学問が個人的または社会的な道德実践と深く結びついているところ

にある。戦国の世が終わり、全国が平定されると、武士の役割は戦闘集団から、農・工・商の三民を統治する封建官僚としての性格を強める。武士は各藩に開設された藩校において、午前中は儒学の古典を学び、統治者として相応しい人格を磨き、午後からは剣術、弓術、馬術、槍術、水練などの武術を学んだ。文武両道という意識が一般の武士にも定着していった。武士は藩校だけではなく、その藩に特有な学びの形態、つまり日常的な生活を通して人間形成を行った。薩摩藩を例にとって見てみよう。

●薩摩の教育風土

西郷隆盛や大久保利通をはじめ、明治維新を断行し近代日本を形成するにあたり多くの人材を輩出した薩摩藩では独特の教育機能を持った組織があった。

戦国大名の多くは、幼い頃より学問僧の教育を受けて教養を形成した。16世紀中ごろに登場した島津忠良（1492～1568）は日新斎または

愚谷軒と号した教養人であった。忠良は薩摩の武士の日常生活に即した教訓となる47首からなる『日新公いろは歌』を書き残している。「古の道を聞いても唱えても、我が行いにせずば甲斐なし」と歌って、古の道の知識は実践してはじめて本来の価値が生まれると説いた。忠良は、毎月定期的に家臣の子弟を集めて、「咄」という会合を開いた。四書の講義を交えて「義理の咄」や「忠義の咄」など、語り聞かせる方法で武士としての自覚を促したのである。教育の原点は「語り」であり、

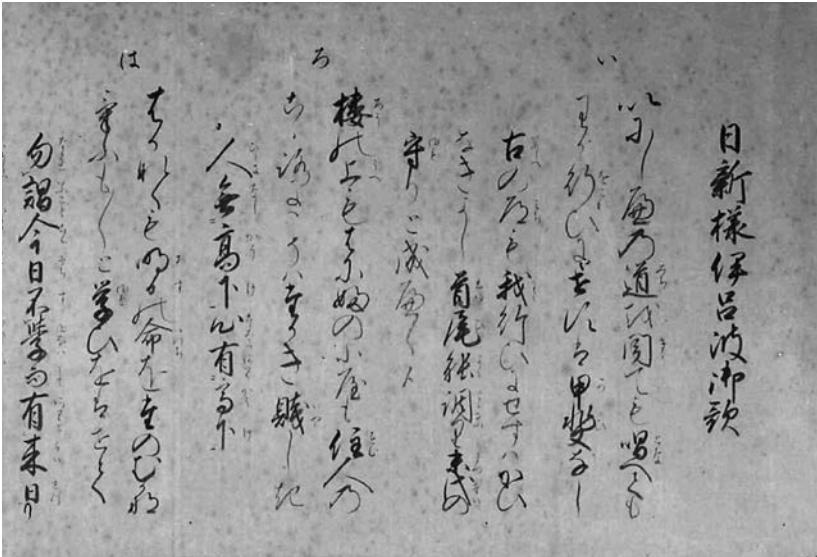
人と人との対面して、語り聞かせるところに「学び」と「教え」が成立する。こうした薩摩藩の教育風土が薩摩の人間形成に大きな影響を与えたことは注目すべきことである。これが具体的な形となって継承されたのが郷中教育である。

●共同生活で学ぶ郷中教育

薩摩藩の城下では「方限」という区画ごとに「咄相中」または「二才咄」と称される青少年の自主的な組織が形成されていた。「二才」とは元

服した15歳から24歳までの男子の集まりである。これ以外に6歳から10歳までの小稚児と11歳から14歳までの長稚児というように、小さい時から子ども集団を形成させ、自治能力を身につけさせる仕組みになっていた。年長の長稚児は生活全般から学習に至るまで小稚児の面倒を見ることが義務付けられていた。郷中という呼称が用いられるようになったのは享保期（18世紀の初頭）頃からといわれている。

郷中においては、共同生活を通して相互に切磋



日新公いろは歌

いろは47文字ではじまる47首の和歌に道德・宗教を織り交ぜた和歌集。島津忠良作。郷中教育で武士の子弟教育の根幹として用いられ、藩内に広まった。
所蔵／尚古集成館



島津忠良像

儒教、仏教に教養が深く、近世島津氏の基礎を作った。
所蔵／尚古集成館

琢磨し、常日頃から武士としての立場をわきまえ、武士に恥じぬ振る舞いをするために、「詮議」という学習方法が設けられていた。「詮議」はもと「穿議」という漢字があてられ、物事を詳しく調べ尽くすことを意味していた。

たとえば、「親の仇を討とうと探し回って船中にあったとき、船が沈みそうになった。そのときに助けの船がやってきたが、よく見るとそれは親の仇であった。さてどうするか」と問いかける。これを「詮議かけ」と称した。命を助けてもらった恩義から、仇討ちはあきらめるなど、これには様々な答えが予想される。しかし、助けてもらったことに対しては厚く礼を述べ、「親の仇であるので覚悟をせよ」と討ち果たすことが正解答として用意されていた。こうして、矢継ぎ早の質問をしかけて判断力を磨いていった。「二人の剣客がいて、小路に一頭の馬が繋がれていた。路が狭いので容易に通り返けることはできない状態であった。一人の剣客は密かに馬の後ろを通り抜けようとしたが、馬が驚いて後ろ足で跳ねようとした。腕に覚えのある剣客は身を巧くかわして通り抜けた。この様子を見ていたもう一人の剣客は、引き返して他の路を選んでいた」。この話を聞いて「いずれが是なるか」と問いかける。恐らく、血気盛んな二才達は、馬に恐れ慄いて回り道をするとは武士にとって恥ずべきものと理解するのであるが、武士の身体はもっと重要なところで役立てるものであり、無駄な危険を冒さず他の路を回った剣客が正しいというのが正解答とされた。

二才達はお互いに「詮議」をかけて自己修練を行っていた。西郷隆盛や大久保利通などが属していた郷中の回顧談が残されている。西郷達は書物をいくらか読んで、本を閉じて、それぞれの考

えを問いただすことが常であったと記されている。各々の「志」や「誠を尽くす」ことから、時勢を論じるなど、極めて現実性を帯びた議論が闘わされた。薩摩藩から、日本の全体を視野に入れたうえで、日本が直面する問題を解決できる見識と度量を持った人物が多く輩出したのは、こうした厳しい討論を通して、知識を知性にまで高めた郷中教育によるところが大きい。

II 庶民教育の伝統

●江戸の教育の原点

現代のように制度としての学校がなかった時代にも子どもは学び・教えられて成長した。

江戸時代の人々が考えた教育の原点は「子どもを大人にする」または「一人前」にすることにあった。近代の学校制度が誕生して以来、私達は「教え」に力点を置いて考えてきた。もともと教授法は近代になって西欧から導入されたもので、それ以前の日本や中国の書物には教授法について書かれたものは稀である。いかにして学ぶか、子どもをいかにして学ばせるかという学習方法について書かれた書物が主流であった。学ぼうとする子ども、または弟子がいてはじめて教えが成立するという考え方である。子どもに教えるのではなく学ばせるのである。今日の日本では学力の低下が問題となり、ゆとり教育が批判されて「学び」よりも「教え」が重要であるという主張が強くなっている。

一般に江戸時代の庶民の子どもの教育といえば、寺子屋が挙げられる。寺子屋は現代の学校と理解するよりも、算盤塾とか踊りやお茶のお稽古のような習い事に近いものであったと考えられる。近

年では、寺子屋という名称を使わず、読み、書き、算を学ぶ「手習所」というような表記が用いられているのはこうした実態によるものである。

●寺子屋の教えと学び

中世の寺院教育では、寺で学ぶ児童を「寺子」と称したが、近世になると必ずしも寺で学ぶのではなく、一般の文字学びを教える人の所に集まる児童を「寺子」と呼び、「寺子」を集める職業としての「屋」、すなわち寺子屋が登場する。

寺子屋は元禄期を境として普及しはじめる。元禄期は商品流通経済が発達し、参勤交代制度と相まって、全国の交通網も急速に整備された。農村においては商品作物が栽培され、また農業技術や品種改良も行われて、伝統的な農業知識に加えて新しい農業の方法や技術を学ぶ必要が出てくる。寺子屋は庶民の間から自然と普及し、都市から農村へと広がっていった。「読み書き算」の学びは契約書の作成や、時には訴訟の準備など、庶民の生活防衛としての性格を持つものであった。

寺子屋では一斉授業は行われず、子どもの習熟に合わせて師匠が学びの対象を考えて設定した。したがって、「落ちこぼれ」は基本的に起こらない仕組みにあった。持ち運びが比較的容易な天神机を、向かい合わせに置くことによって、学習が進んでいる子が遅れている子を手助けするという工夫も行われていた。天神机というのは、筆が落ちないように両袖に筆返しが施されていて、それが天神さんの鳥居に似ているところから、そのように呼ばれるようになった。寺子屋の授業を描いたどの浮世絵を見ても、子ども達は伸び伸びと学んでいる様子が描かれている。



一掃百態 寺子屋図

渡辺華山画

喧嘩をしている子どもや学習に飽きた子ども……。一斉授業を原則としない寺子屋で、伸び伸びと学ぶ子どもの様子が描かれている。

所蔵／田原市博物館



風流てらこ吉書はじめけいこの図

歌川豊国（初代）画

寺子屋での新年稽古始めの様子。師匠、助手、寺子（生徒）も女性で、広く女性の間で文字が学ばれていたことがわかる。

所蔵／公文教育研究会



山片蟠桃像

懷徳堂が輩出した、商人であり学者であった山片蟠桃。
写真提供／大阪大学懷徳堂研究センター



懷徳堂

1724年、大坂の豪商「五同志」が出資し、三宅石庵を学主に招き開設。大坂の学術発展と商道德の育成に貢献した。
写真は1916年に再建された重建（ちょうけん）懷徳堂。
所蔵／一般財団法人懷徳堂記念会



適塾

1838年、蘭学者で医者であった緒方洪庵が設立。幕末から明治に活躍する人材を数多く輩出。国内唯一の蘭学塾の遺構として現存する。
写真提供／大阪大学

● 師匠とテキスト

寺子屋の師匠は、農村では僧侶や神官、または隠居をした農村の指導者などが多く、無料で子ども達に文字学習の機会を提供していた。都市部では職業としての寺子屋の師匠が増え、城下町では武士や町人、大都市では多くの女師匠が存在したといわれている。また、浮世絵などには、女性が自分の子どもに読み書きを教えている姿も描かれている。江戸時代には、女性に学問はいらないうことで識字率が低かったといわれているが、女性を対象とした読み物も多く出版されているところからも、文字学習が広く女性の間にも浸透していたと理解できる。夫婦で寺子屋を経営することも珍しくはなかった。午前中は共通の文字学習で、午後からは女の子は裁縫や三味線を、男の子は算盤というように、極めて実用的な学習が用意されていた。寺子屋で用いられたテキストは「往来物」と呼ばれ、大坂のような商業地域では商売に必要な文字からなる『商売往来』『問屋往来』『農業地域では『百姓往来』『農業往来』、漁村では『船方往来』などがあり、生活に即した内容から構成されていた。全国に共通したものには『庭訓往来』『実語教』などがあり、人として求められる教訓や日常生活に必要な知識や年中行事などが盛り込まれていた。

江戸時代の子ども達はこうして寺子屋（手習所）で読み書き算盤を学ぶのであるが、子どもから大人になる教育システムは、様々な年中行事やお祭りなど子どもを取り巻く地域社会が持っていた。これらの行事を通して、共同体の一員としての自覚を深めるのである。また12〜13歳で寺子屋を終えた子ども達は奉公先の商家や職人の親方を通して「一人前」として成長する。商家の主人は親で

あり師でもあった。子ども達は商売について学び、能力のある者は暖簾分けしてもらい、独立していった。職人の親方は技術の伝承だけではなく、職人として相応しい度量と生き様を学ばせた。

Ⅲ 自由な学び舎——私塾

● 大坂町人の学び

江戸時代に入ると、還俗した僧侶や学問を志す町人や武士が登場して私塾を開設するようになった。日本朱子学の祖といわれた藤原惺窩やその弟子で徳川幕府の官学の祖といわれた林羅山は相国寺や建仁寺を出て市井で朱子学を説いた。京都の上層町人出身の伊藤仁斎は古義堂で教え、大洲藩士であった中藤樹は武士を放棄して近江国高島郡で藤樹書院という私塾を開いた。

「天下の台所」や「商人の町」として知られた大坂でも多くの私塾が開設された。江戸の中期に「五同志」と呼ばれる豪商達が出資して開設された「懷徳堂」は朱子学を教授し、山片蟠桃や富永仲基など独創的な町人学者を輩出した。山片蟠桃は合理的な考えに基づき日本の神代以来の歴史を批判的に考察し、西洋の天文学の成果に基づいて地動説をと考えた。また、富永仲基は仏教各派の教義の発展史を考察し、後から付け加えられた（加上）教義ほど複雑な様相を呈して、必ずしも仏陀の教えそのものといえないと論じた。

江戸の中期から後期にかけて新しい学問である蘭学が普及し、長崎や大坂、江戸を拠点として蘭学塾が開設されるようになった。大坂では多様な蘭学塾が開設されたが、そのなかで緒方洪庵が設立した「適塾」では、「教えられる」よりも「学びとる」ことに重きが置かれ、能力主義のもと、

塾生の切磋琢磨によって最先端の医学知識が学ばれた。とくに驚くべきは、緒方洪庵がベルリン大学のフーフェランドの著書を翻訳して医の倫理について言及していることである。最先端の知識と技術を持った医師がこの世に存在するのは、自分のためではなく人のためであるので、医者は安逸を願うのではなく、名声や利益を顧みずに人を救うことだけを願うべきであると説いている。また「病者に対しては病者を見るべし、貴賤貧富を顧みることなかれ」と述べ、医師の報酬は富者の与える手から零れ落ちる金銀ではなく、貧者の両眼から溢れる感謝の涙であるとも説いた。これらは適塾の教訓として学ばれ、ここから日本赤十字社の基礎を作った佐野常民や窮民医療に尽くした高松凌雲のような、高い志を持った人物が輩出した。「懷徳堂」や「適塾」は、利益を最優先する商業都市という大坂のイメージとはかけ離れて、合理的で独創的、かつ人間性豊かな学びの「場」として全国に開かれたものであった。それは商人が経済的にも相対的に自立して生活した大坂という地域が持つもう一つの個性から生まれたものに他ならない。

武士を育てた藩校や庶民の子どもに読み書きを学ばせた寺子屋、それに身分を超えた学び舎であった私塾も、それぞれの地域が持つ個性や教育力に支えられていたからこそ、その教育効果を挙げることができたのではないだろうか。地域が持つ豊かな教育力、それはお祭りであったり、子どもの誕生であったりお葬式であったりと、地域の人々を結びつける様々な行事を通して形成されてきた。地域が固有の学びの場となったとき、学校教育も本来の機能を取り戻し、また独創的で、人間性にとんだ学問が生み出されるかもしれない。